



予期せぬこと

北海道立総合研究機構の姉崎克典さんよりバトンを受けました。弘前大学大学院理工学研究科の川上淳と申します。姉崎さんは、20年以上も前のこととなりますが、私が弘前大学理学部に助手として着任して直ぐの頃の学生さんです。私は、有機化学講座でしたが、姉崎さんは、いずれも日本分析化学会東北支部長を務められた大関邦夫先生や糠塚いそし先生のおられた分析化学講座の優秀な学生さんでした。

さて、本題に入りますが、人生の中では、“予期せぬこと”に大なり小なり出会うものです。

私の最初の大きな“予期せぬこと”は、母校の東邦大学を卒業後、同大大学院に入学して直ぐの頃に訪れました。それは、医師で、現在の私と同じく大学教授でもあった父が、54歳という若さで、^{がん}癌で亡くなったことと、同時期に私自身が左半身に障害の残る大病をしたことです。それまで私が経験してきた病気や怪我は、治療をすると治るものばかりでしたので、父の死や、障害の残るような“治らない病気”があるという現実には、少なからず衝撃を受けました。私は、リハビリ生活を経て、なんとか大学院に復帰することができましたが、有機化学の研究室の所属だったため、病前前は、有機合成実験をしていましたが、指導教授の岩村道子先生にご配慮いただき、しばらくの間は理論計算化学を勉強することになりました。現在では、有機化学者が理論計算を利用するのは当たり前ですが、当時は、少し大きな分子になると、計算機センターの大型コンピューターで数日の計算時間を要するなど、理論計算はまだ物理化学の一部の専門家が扱うものという感じでした。ですから、有機化学を専門とする自分が、コンピューターを用いて理論計算をするようになるとは全く“予期せぬこと”でした。しかし、この時に理論計算化学を勉強したおかげで、その後の研究で大きな助けとなりました。そして今やパソコンの性能が飛躍的に向上したことで、理論計算は有機化学者の誰もが使う、研究に欠かせないツールの一つとなっています。

さて、大学院までは、合成したモデル分子を用いて、光誘起電子移動や分子内エキサイプレックス形成について、物理有機化学的な研究を行っておりましたので、分析化学を、あまり身近に感じたことはありませんでした。平成6年3月に博士の学位を取得し、その5月に弘前大学に助手として着任することができましたが、当

時の地方国立大学は設備も古く、十分な測定機器もございませんでしたので、大学院時代と同じような研究を続けることは少し難しい気がしました。そこで、新たな研究テーマを、蛍光分析試薬である蛍光性化学センサーの合成と応用に決めました。ここで初めて分析化学を意識するようになり、日本分析化学会にも入会しました。平成9年10月に理学部から理工学部へ改組され、小講座制から大講座制へ変わった際には、前述の分析化学がご専門の大関先生や糠塚先生と同じ大講座の一員となり、約10年間一緒に過ごしました。現在は、大講座制も廃止され、各研究室単位での活動となり、私は有機化学系の学会に出席することが多いのですが、時折、日本分析化学会の年会や討論会にも出席し、*Anal. Sci.*誌に論文投稿もさせていただいております。また、弘前で日本分析化学会の催しがある場合は、会員としてお手伝いもしております。学生時代の自分を考えると、研究テーマの変更による日本分析化学会とのかわりも、“予期せぬこと”の一つと言えるかもしれません。

最後に、最近の“予期せぬこと”を二つ。実は、令和2年3月に、最愛の妻が、55歳の若さで、父と同じ様に癌で亡くなりました。癌が見つかったから僅か10か月後のことです。私にとって、これほど悲しく“予期せぬこと”はありませんでした。定年までには、まだ十年程ありますが、老後は妻と一緒に楽しく穏やかに暮らせたならと漠然と考えていた未来は、叶わぬ夢となりました。そしてもう一つは、新型コロナウイルスのパンデミックです。大学の授業も、学会発表もオンラインと、まさに世界が一変しました。誰がこのような状況を予想できたでしょうか。この原稿は、令和3年10月に書いているのですが、掲載予定の令和4年2月にはどのような状況になっているのでしょうか。新型コロナウイルス感染症が終息することを祈るばかりです。

今回、“予期せぬこと”について書いて来ましたが、“予期せぬこと”は思いのほか多く起こるような気がします。災い転じて福となす場合も、そうではない場合も様々あるとは思いますが、どんな時でも、慌てることなく、何か希望を持って、前向きに生きて行きたいものです。私のリレーエッセイはこれで終わりです。私のバトンは、東北大学大学院理学研究科の佐藤雄介先生にお渡ししたいと思います。乞うご期待ください。

〔弘前大学大学院理工学研究科 川上 淳〕